岡麓著

歌集

庭苔

平福百穂畫伯裝幀
アララギ叢書第二十二編

東京　古今書院發行

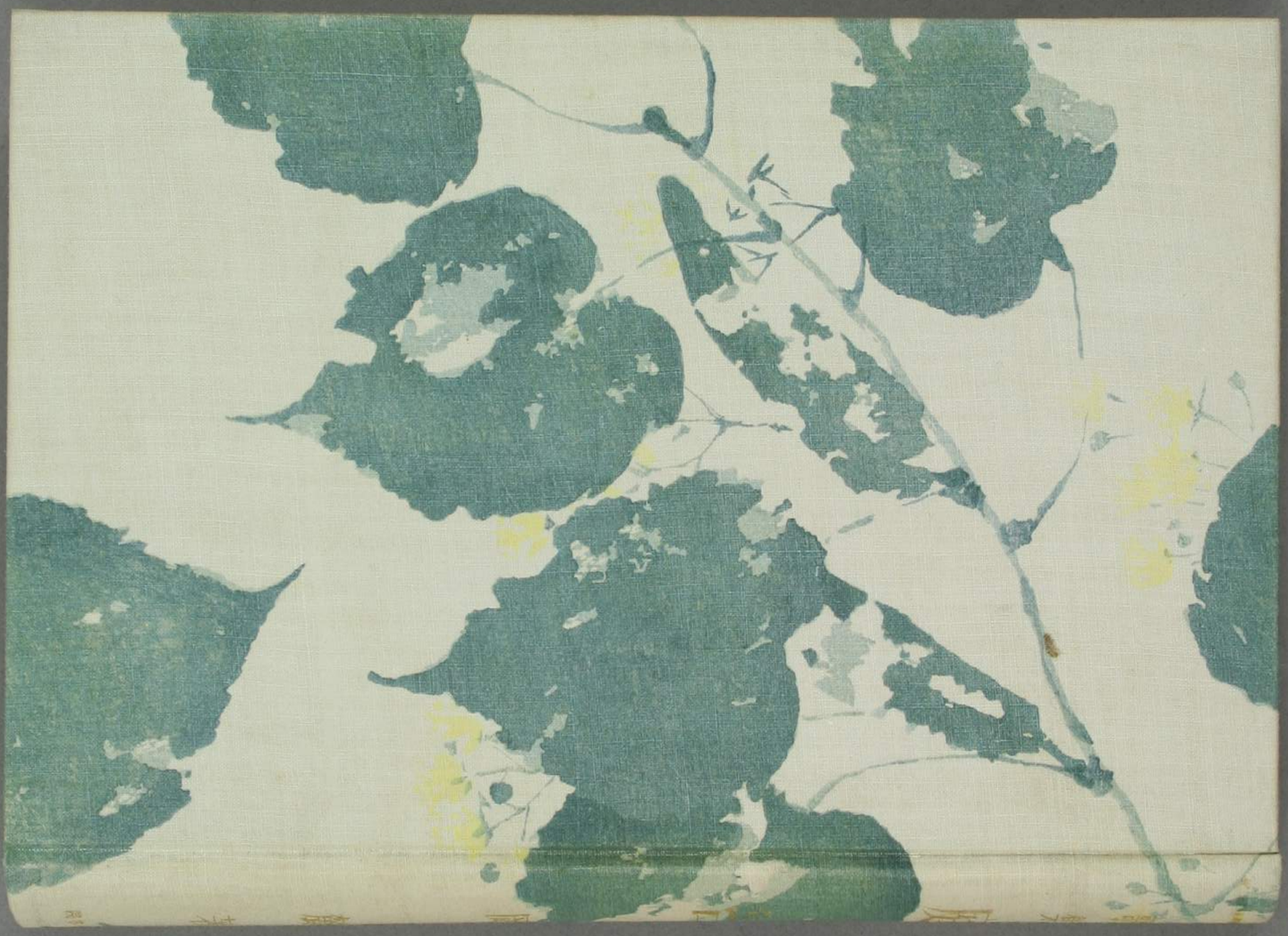
歌集

庭苔

岡麓著

古今書院

Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



歌集

庭苔

國龍著

古今書院

岡麓著

アララギ叢書第二十二編

歌集

庭苔

東京 古今書院發行

庭苔目次

裝幀……平福百穂氏

大正五年

家うつり（六首）……一
春夜獨座（六首）……三
亡友節（二首）……六
梧桐（四首）……七
梅雨（六首）……八
無花果（七首）……一一
左千夫忌（三首）……一三

青松毬（三首）……一五
夕顔（七首）……一六
蟬（四首）……一九
秋蚊帳（三首）……二〇
子規忌歌會（二首）……二三
異教徒（五首）……二三
兄弟（七首）……二五
初冬の夜（六首）……二八
霜夜（七首）……三〇
松蟬（五首）……三三

大正六年

早春（四首）……二五
紅梅（三首）……二六
木蓮の雪（七首）……二八
山王山の櫻（七首）……四〇
接骨木（四首）……四三
ふくろ藤（八首）……四五
青柏（七首）……四八
松花（三首）……五〇
子子（二首）……五二
百日紅（四首）……五三
天河（四首）……五四
坂（六首）……五六

松の下苔(六首)……五八
蟲聲(七首)……六一
暴風雨の後(四首)……六三
時雨烏(三首)……六五
齋藤茂吉氏送別歌會(二首)……六六
枇杷の花(七首)……六七
冬日(五首)……七〇

大正七年

春めく朝(四首)……七二
春寒(五首)……七四
春雨(七首)……七六

黒髪(三首)……七九
夏のはじめ(三首)……八〇
雛芥子(七首)……八一
紫陽花(七首)……八四
龜(七首)……八七
早秋(八首)……九〇
秋海村(七首)……九三

大正八年

若水七首)……九六
朝霜(二首)……九九
寒曉(八首)……一〇〇

亡母（十四首）……一〇一
寒夜（七首）……一〇八
雪（七首）……一一一
海藻（八首）……一一四
冬海（八首）……一一七
鴨（二首）……一一〇
赤椿（二首）……一一一
藤のわか葉（二首）……一一一
櫻草（二首）……一一一
梅雨（五首）……一一四
百合花（五首）……一一六
蟋蟀（六首）……一一八

霧（七首）……一二一
冬日（三首）……一二三

大正九年

節七回忌歌會（二首）……一二五
蕗薬（五首）……一二六
悔い（六首）……一二八
桐花（五首）……一四〇
紫雲英（四首）……一四二
青嵐（八首）……一四四
わが家（四首）……一四七
冬欅（三首）……一四八

麥畠(三首)……一五〇
櫻田門外(二首)……一五一
梅雨頃(三首)……一五二
梓月庵(四首)……一五四
秋の蟬(五首)……一五六
秋の草(五首)……一五八
大龍寺子規忌歌會(二首)……一六〇
蓁吾花(二首)……一六一
暮秋(二首)……一六二
冬日(四首)……一六三

大正十年

壬戌歳旦(三首)……一六四
冬朝(二首)……一六六
夜雪(三首)……一六七
春朝(四首)……一六八
植物園(三首)……一七〇
夏花(六首)……一七一
史料展覽會の折(二首)……一七四

大正十一年

夏日(四首)……一七五
秋日(三首)……一七七
親子(三首)……一七八

晩秋（二首）……一八〇
冬の玉川（五首）……一八一
冬朝（二首）……一八三

大正十二年

雪（二首）……一八四
躑躅（二首）……一八五
牡丹櫻（二首）……一八六
日比谷公園の池（四首）……一八七
栗穂（五首）……一八九
震災（二十五首）……一九一
岡田正美氏を悼む（三首）……二〇四

アララギ發行所の庭（三首）……二〇六
琴（三首）……二〇七
除夜（一首）……二〇八

大正十三年

千駄ヶ谷（一首）……二〇九
土筆（二首）……二一〇
春のはじめ（六首）……二一一
屏風坂展望（一首）……二一三
餘寒（三首）……二一四
弟四郎の妻逝く（二首）……二一五
震災後佛境なし（一首）……二一六

墓所の松(四首)……二二七
春草(三首)……二二九
晩春九品佛に詣づ(五首)……二三〇
雨もよひ風(二首)……二三二
白田舍にて(二首)……二三四
郁子の花(三首)……二三五
初夏(一首)……二三六
代々木山谷の家(三首)……二三七
聖心女子學院(一首)……二三八
駿河臺(三首)……二三九
曉にめざめて(一首)……二四〇
夏日燒跡に來りて(二首)……二四一

湯田村(二十五首)……二四三
赤彦兄病む(二首)……二四四
正岡先生二十三回忌(三首)……二四五
四郎より文通あり(二首)……二四六
秋夜弟の家にて(二首)……二四七
晩秋(三首)……二四八
諏訪湖(五首)……二四九
諏訪明神上社(九首)……二五二

大正十四年

火災(二首)……二五五
茂吉兄歸朝(二首)……二五七

孫（六首）……二五八
春暖（八首）……二六〇
櫻草（三首）……二六三
五月五日（三首）……二六五
次女の家の初節句（一首）……二六六
たまたま暇あり（三首）……二六七
左千夫忌歌會（二首）……二六八
書讀みさして（七首）……二六九
遠蛙（五首）……二七二
天神橋畔の家（四首）……二七四
銀杏の花（二首）……二七六
麹町の家の跡（二首）……二七七

中秋名月（四首）……二七八
正彦の家にて（四首）……二八〇
大龍寺にて（二首）……二八一
柿蔭山房を訪ふ（八首）……二八三
巻末記……一

家うつり

大正五年三月麹町區元園町に轉居す

春さむき風吹きにけり幾度(いくたび)か家を移(うつ)して住み
かはるべき

ふたとせの前に來て見しこの家に移りて住む
はうれしかりけり

舊よりの神棚釣れり移り來しここの鴨居の上
高ければ

春の草もゆる二葉のはつかにも我いのちをば
みるべかりけり

春の日に移り來りて庭の木の枯草づるをたぐ
りたぐるも

雨氣もつ春の夕ばえ洋館の窓あきたりと子ら
のよろこぶ

春夜獨座

庭松の枝にかかれる月かげの春の夜なれやう
ちかすみつつ

わが心さびしけれども春の夜の月かげさせり
庭松が枝に

手入れせぬ庭松が枝のしげり葉のおほほし春
の月は細くて

春の夜の月の光のもどかしきわが身ながらも
時にまかせむ

春の月おほろげながらもとの身にたちかへる
べくおもほゆるかも

庭松の葉ごもり月のかそけくも春の夜ごころ
なまめけるかも

亡友節

亡友を夢に見しかば朝寢する軒端の松に鶯の
なく

亡友を夢に見にけりこの家に來ざる嘆きの通
ひけむかも

梧桐

梧桐は幹をみる木と窓ちかく植ゑし嗜好もあ
りけるものを

梧桐の瑞のわか葉のひろがりてふはりふはり
と風わたるなり

人の身のまはり合せのすべのなさ梧桐の葉に
風わたるなり

降りたらぬ雨氣の風が梧桐のわか葉をわたる
夕なりけり

梅雨

さみだれの雨間いぶせしあかき花柘榴は咲け
どしげき葉がくり

さみだれの雨にのびゆく烏歛苺竹垣こえて繩
になりつつ

さみだれのふりつづければ蒼朮をたきて今宵
はひとりすわりぬ

さみだれの雨夜に戸棚かたづけて濕氣おほき
書とりいでつ

さみだれの降れば厠の壁隅に無花果の葉をと
りてつるせし

梧桐の花に雀のとまりゐて今朝梅雨晴の風吹
きにけり

無花果

梅雨晴の日にも乾かぬ塀ぎはに無花果の葉は
廣ごりにけり

青き葉のひろごるかげに無花果のむすびし實
をば知らでありけり

無花果の二つなれりとみまもればその上にま
たちひさくいくつも

少女子の乳くびに似たる無花果の實のなりそ
めは愛くしきかも

無花果は木ぶり枝ぶり品ひくきものにはあれ
ど實をむすびけり

無花果の實をむすぶ時さみだれの雨の晴間は
すくなかりけり

無花果の實がなりたるをめづらしみ夕月かげ
にはしゐせりけり

左千夫忌

赤彦のもとにいとなむ左千夫忌に呼ばれて來
けり小雨降る夜を

小雨ふる夜むしあつし歌をよむまどゐにわれ
のあるがともしさ

鉢植の柘榴は花をもたずして若枝のさきにう
す紅のさす

青松毬

松が枝の葉なみのひまに見え透きて青空高し
夏の日ざかり

いたづらに青松毬をもぎにけり脂の粘りが手
につきにけり

いなびかり遠くの方に雷なれり軒端の松の宵
明ぞら

夕顔

ゆふがほはほのぼの咲けどあかときと烏が啼
けば萎む花かも

ゆふがほの花ほのぼのとひらけどもぬば玉の
夜はみじかかりけり

ゆふがほの花の白きがかろらかにゆれゆれや
まぬ夜のすずしさ

ゆふがほのほのぼの白き花咲けりさびしき榮
の見ゆるこの夜や

人はみないねしづまりてゆふがほのまがきの
うへに星のひかりぬ

ゆふがほの花の一夜をあかしかね夜半におき
たり遂にくはれて

ひるよりもあかるき月の眞夜中におくつゆ滋
し夕顔の花

蟬

庭隅の柚の木のもとのしめり土蟬のぬけ穴許
多あきたり

をさな子はもち竿もちて蟬とりに夏のやすみ
を遊びくらしつ

をさな子は蟬とりあきてとんぼつり夏のやす
み日過ぎにけるかも

汗ぬぐひかへるわが家西日さしたたみほてり
てもろ蟬のなく

秋蚊帳

秋されどまだつる蚊帳に髪かりてかしらかろ
くもこよひねにけり

秋の夜をまだつる蚊帳につぎあててわがふり
妻はおもやせにけり

つり蚊帳のぬひめほつれて口あけりすずしき
朝の風の入りくる

子規忌歌會

そのかみの根岸歌會の思出のおほよそがたり
とがめずもがな

雞頭の色は往時にかはりなししかはあれども
とし經たりけり

異教徒

大正五年十一月聖心女子學院長プリヂット、ヘイドン氏の葬儀に列す

十字架の前の柩に異教徒もひざまづきけり人
まねをして

讃美歌をうたふが中にわれ一人異教徒なれば
口をつぐめり

異教徒のわれや無言の拜をして柩の靈をとぶ
らひにけり

異教徒のすべこそなけれ天國はあなたときけ
ど遠く遙けし

うつそみの人なるわれはキリストのをしへ子
たちとともになげきつ

兄弟

ゆくりなく遠くよりして弟の來りたれども心
はさびし

兄弟の年月はなれ居るからにうちとけ語る事ぐさのなき

幼くて父にわかれし兄弟つひに睦もあひがたからむ

母の前に兄弟三人坐り居て何ぞ今宵の心さびしき

三つ栗のひとつに育ちたりし日も茶飲み菓子食ひかくやありけむ

はなれ居て年月うとく過ぎ來つるこの兄弟の兄ぞわが身は

弟の神戸牛肉持て來たりあぶり食ふ時歯を嚙みならす

初冬の夜

十一月二十二日の日くれ時こがらしの風吹き
いでにけり

理由もなき心いらちにみち行けり夕木枯の風
吹きすさぶ

冬の夜の風吹きつけてつねに來ぬみちはさび
しくおもはるるかも

堀割の淺水ひきし濡土に街燈のかげ舒びてう
つれり

裏河岸の船荷揚場の暗闇に鐵板はこぶ地ひび
きの音

木枯の風吹きつくる縁日のかんてらの灯は片燻すも

霜夜

子らのため火入れし行火子らいねて我足あぶる霜夜ふけけり

冬の夜の眞夜中過ぎて冷え來なりあかときかけて霜の降るらむ

一時過ぎあたる行火の火をほりて霜夜を肌は汗ばみにけり

風の音すこしもなくて夜半過ぎ霜ふるらむか冷頭痛すも

ふけ行けば霜夜しづまり軒の柚の落つるひびきの重きしめりや

霜のふる眞夜中過ぎの時の鐘遠くにきこゆ目白なるらむ

しんしんと霜降るならし夜あかしのあたま鈍りてまとまりもなし

松霜

庭松の葉組こまかに霜ふれり冬の朝げの日は遲きかも

松の葉の細葉細葉におく霜のこまやかにして今朝眞白なり

庭松の葉さき揃へるしげり枝にけさ眞白くも
霜ふりにけり

庭松の葉ごもり白き今朝の霜日があたらねば
解けもせずして

まろまろと首をすぼめて寒雀霜ふり松の枝に
とまるも

早春

眞冬へてしげる檜のした枝のよごれ目立ちぬ
春の日ざしに

土肌の冬のあらびのあといまだとのはざれ
ど雨じめりせり

ほりさげし赤土みちの勾配にふたたび春の霜
のましろさ

梓弓春のひかりは庭椿なめらかにてりいまだ
寒しも

紅梅

紅梅の一重の花の色の濃さ幹細くして老木な
りけり

紅梅の盛の花に朝日かげ正面にさして美しき
かも

三月になれど寒けき春の日のいたましくあれ
や紅梅のはな

木蓮の雪

木蓮の花に降る雪はなびらにふれてはとけて
雫せりけり

いづこにてなくか烏の聲ひくし雪ふりかかる
木蓮のはな

木蓮の枝高ければふる雪の風あてつよく花ゆ
れやまず

かきくらし雪降る中の木蓮の花は雪よりなほ
白く見ゆ

木蓮の花のさかりの春の雪ひと時つよく降り
てやみしか

春の雪ふれどもとけてつもらねば木蓮の花さづつかずあり

雪ふりしあとともなくて夕日さし木蓮の花かろくゆれをり

山王山の櫻

山王やま矢大臣門の石猿(いとざる)はさくら咲けどもかしこまりたり

しづかなる山王やまの夕ざくら楓の若芽ひらきまじれり

土方二人(もつこ)春になひて土をはこぶ山王やまの花さかりなり

山王やまあけの末社の屋根の上おほひて咲け
りさくらの花は

境内は夕日遠でりさくら花咲けるが中に朱の
御末社

椎の木の老木のかげの掛茶屋にくれゆく花の
いろを惜めり

さくら咲く山王やまの夕べ時老木の椎を風は
吹き立つ

接骨木

にはとこの花しらじらと咲れども青葉の小枝
短かかりけり

にはとこの青葉しげりて枝させどふところあ
さく夕日照るなり

にはとこの青葉しなひて日光うすく春のなが
き日夕さりにけり

土乾き撒く水瓶を庭隅のにはとこの木のもと
にすゑ置く

ふくろ藤

春の日のあたるひかりの和らぎに藤の花芽は
ふくらみにけり

うららとてれる春日にふくろ藤ふくろ解れ
ぬ花めぐしもよ

夕月は圓く大きく空にあり藤の花芽はほぐれ
かかれり

ふくろ藤ふくろの中にふくらめど花紫のいろ
はかくれず

ふくろ藤花むらさきのほのにほひ春のなごみ
はつつみかねつも

藤なみの花咲く下の姉妹なかむつまじくをと
めさびすも

紫の藤なみの花ふさながししづかに春の日は
くれにけり

春の日に咲ける藤浪たゆたへどいまだも散ら
ずわれ老べしや

青柏

文庫の窓あけはなつ五月來て柏の若葉ひらきそめけり

文ぐらの机によりてする墨の硯にうつれ窓青がしは

かがまりて古書目錄をかきてをり窓の柏木若葉しにけり

うぐひすのなく聲高し柏木の若葉ひろごる文ぐらの庭

ふみぐらにますぐに高く立つ柏幹の荒皮古色つきたり

朝ぎよめ文庫の窓あけてあり青柏葉をわたるそよ風

枝ぐみの堅き柏木夏になりやうやく青き葉かげつくるも

松花

ふみぐらの二階の窓をあけてあれば松の花粉が吹き入りにけり

夕日かげまばゆき松の下枝の花粉こぼれてちるがけぶれり

庭の面の乾きて白き土の上に松の花粉が上溜すも

子子

灰汁桶の水の上澄み幾日經て沸きにけむかも
黒子子子

灰汁桶に黒子子が沸きねたりさみだれ長く降
りつづきしか

百日紅

百日紅花のさかりはいとながし秋近づきて暑
さまされり

眞日の下百日紅はもえたちて暑さづかれの人
をゆるさず

夏ふけて日々のつとめにつかれたり百日紅の花はまさかり

庭井戸の水減りけれは撒水をおこたる庭の百日紅のはな

天河

秋されば濃き藍色の夜の空かがやく星の數のさやけさ

秋めける夜風涼しき路端に玉蜀黍をやきひさぎをり

小夜ふけて秋の氣色ぞ身にせまるひくく傾く天河かも

天河流るる末は消えにけり消えて夜空の暗く
遙けき

坂

秋の日の朝照すなり坂下のみちに小砂利を敷
く音きこゆ

坂むかひ高所はひろき庭がまへ朝の日さすも
百日紅の花に

荷車のかけごゑきこゆ照りかげる秋の夕日に
坂をのぼるか

もの賣の聲々なかに淺蜊賣あきの沒日の坂下
行くも

坂むかひ西洋館に灯がともり遠き木立よ秋蟬(あきぜみ)
のきこゆ

秋の夜の座敷の灯(ひ)かげ狹庭(さには)べの建仁寺垣にほ
のにうつろふ

松の下苔

秋の雨降りてやまねば庭苔に土のおちつく秋
は來にけり

根あがりの松の下土(したつち)うちしめり秋はこまかき
苔むしにけり

赤土はしたしみふかし秋の雨ふりそそぐ日の
庭苔のいろ

秋されば松の木下のしめり苔雀が一羽おりて
あされり

庭松の枝さしおほふ下苔のふくむしめりの足
りもたらずも

秋の雨ながれてぬるる庭の石は水を吸ふかと
おもほゆるかも

蟲聲

蟋蟀はなきそめにけり母の腰また痛むらむ寒
さいたりぬ

蟲なきて夜のびゆくはつらしとふ母のかご
とをきくがくるしき

蟋蟀はいまだなくねの弱々し秋の夜ふけのふしどにぞきく

垣の外の崖は雜草生ひ茂り夜な夜な蟲のあつまりどころ

秋の夜のひえびえとする草にゐて鳴くなる蟲は侶をよするか

ひとりこそ胸はやすけれ聲たかくゐんま蟋蟀鳴く夜來れり

この秋はかそけき蟲のなくねにも季節のうつるをひたにかなしむ

暴風雨の後

わが家の垣根倒れし暴風雨の後崖下みちを人のとほる見ゆ

暴風雨ふき庭の垣根は倒れけりたふれし垣に枸杞の實赤し

崖下の家の小庭に竹垂れて靄立こむる夕ながめかも

門脇に竹垂れかかり人力車一臺待てり秋のあめは降り

時雨鳥

時晴れのまた雲動く曇り朝時雨がらすの鳴きかはす聲

時雨ぞら松杉の中に銀杏の木染めてあかるく
烏のなくも

をさな子にうれひはなけれ時雨ぞら頻あから
めてあそび廻れり

齋藤茂吉氏送別歌會

君が行きわれもいのらむ大洋を遠く渡らす身
をすこやかに

わがどちのあつまりよりていはへれば必君に
事なかるべし

枇杷の花

冬の日の午後にやうやくさし來れどさす光う
すき枇杷の木の花

午後の日のぬくみもなけれ枇杷の木の下枝の
花をつまみとり見つ

夕さりてはつか日のさす枇杷の花かなしきか
なや虻のうなりは

枇杷の花夕べの日ざしほのぬくき光にうごき
て虻の生きたる

かくしごとあるにあらねどわれひとり嘆く夕
の枇杷の木の花

木枯のすさぶ夕戸に枇杷の花さびしけれども
實をむすぶらむ

去年(こぞ)よりは二十日(はつか)早くも霜ふれりさかりはながき枇杷の木の花

冬日

母神經痛のために此冬をうち臥せり

たらちねの母の病をうれひつつ霜どけおそき氷土(ひづち)をふむも

あゆみ來る路せばくして大木(たいぼく)の欅(けやき)落葉にしろき霜かも

かの岡に落葉たくらし冬の日の日がさしをれば白煙(けむり)立つ

冬の日のふかき曇のしづけさよ母の病のひま
あるごとし

そこびえの夕べ歸りて顔のぞく母は眠れり病
づかれて

春めく朝

界木の椎の下枝はらはれてならぶ墓石あらは
にも見ゆ

墓原の日あたりわろきところにも春さり來れ
ば草もえにけり

青山の墓地下行きの電車みち枯生ながらに日
は春めきぬ

兵營の赤き煉瓦の建物のふりたるさまにさす
春日かげ

春寒

朝霜の庭は掃かねば楪葉の木下に落し黒き實
の玉

冬三月母病臥していつしかと待ちわびをるに
春の霜降る

いつまでもふぶみて咲かぬ沈丁花心もとなき
春の寒さや

寒あけの後一月は春の日もものびのびとせぬ沈
丁花のはな

蕎麥(そばぐ)き花咲きにけり表立(おもてだつ)見ばえなきこそ本性(ほんしやう)ならめ

春雨

軒したの楓の細枝(ほそえだ)芽をもちてつぶつぶだてば雨のそぼふる

かじかがみこちたきこりの解(ほど)けてゆく春のはじめの雨そそぎかも

一面(いちめん)の芝生の庭は春雨にひたすらぬれて日のくれゆくも

夕庭の芝生の中の窪溜(くぼだまり)降るはるさめのうづを見てをり

春雨のゆふべ近づく庭芝におりし烏の飛びて
鳴かずも

外に行くと病み臥す母に告げにけり春の雨夜
の宵しづかなる

春雨のふれる夜ふけにかへり來てひそかに母
の睡眠をみるも

黒髪

さみだれの雨の夜ふけにわが妻は髪を梳きを
り次の間に居て

ぬばたまのながき黒髪さみだれの雨夜に梳き
て明日を庇へり

さみだれの夜髪梳きて櫛の歯にからむ抜毛を
灯によせて見つ

夏のはじめ

風邪ひきて十日こもりゐ外に出れば日かげ夏
めくつよさとなりぬ

坂にそふ石垣屋敷土どめの躑躅は青く葉にな
りにけり

町なかの家居の庭にところ狭く棕櫚ひろごり
て花の咲きたり

雛芥子

次女茂子友だちよりもらひ來たりて挿けおきたり

もらひきていけおきし子とかたらひて芥子の花見る宵まどゐかも

ひな芥子の花うつくしく見とれゐる夜のくつろぎは安らけきかも

ひな芥子の薄花びらの輕けれやゆれもせなくにゆるるがにみゆ

灯に映ゆる机の上の芥子の花全くひらきて手をふれがたし

雛芥子のうす花びらの眼にたたぬこまかき絞のよるのしたしさ

文机の芥子の花しべくづれ落ちて硯の中の墨
にひたりぬ

口廣の瓶にいけたる芥子の花むきさだまらず
うごかすごとに

紫陽花

さみだれのをやみのひまのうすら照り濕氣つ
めたき風の吹き來も

咲きそめしあぢさゐはまだ色うすしさみだれ
晴を待つにもやあらむ

つゆどきのくもりはれねど病みて臥す母がね
あせの夜着を干すかも

竿竹のしなひて重き母の夜着よごれもしるし
つゆどきぐもり

つゆどきのくもりの下のあぢさゐの花咲けれ
ども母は臥すかも

ものうさに土をふみたれさみだれの苔のぬめ
りはここちよからず

つゆどきの庭土ふめばあぢさゐの下枝の花に
蟲ばしら立つ

龜

次男良弟龜を買ひ來る

祖母の臥す枕べに龜をもちきたり疊這はせて
よろこぶ子らは

龜一つ疊の上を這はせつつ母のふしどにあつ
まりすわる

眞晝間の母のふしどにすわりゐてたたみのよ
ごれ見ればさびしも

床の間に這ひあがらむと首のばす龜を見てを
り病む老母は

龜の甲水乾きしてあつ苦し兒らはたたみのう
へ這はせけり

無花果の枝さしおほふ濡縁に龜を這はせて兒
どもはあそぶ

風邪ひきてわれも熱あり母の臥すかたへにを
れば蜩のなく

早秋

朝夕の風の涼しく秋立てば母のやまひのたど
きしらずも

寒くなる日の一日もおそかれと思ふがはかな
病む母のため

月高く空にすみけり一日のつかれに夜風つめ
たくおぼゆ

母は病み子どもいねたればあふげる月廣々し
門に出でてしばし

こほろぎのほそぼそ聲をいねがての母はかこ
ちぬ蟲がなくよと

夜ふくればこほろぎの聲耳近し病み臥す母は
安眠(やすい)しかねつ

こほろぎの聲きくなべにつゆ霜の秋の夜寒を
母は嘆きぬ

ひととせを病み臥す母は蟋蟀のなく秋の夜を
あかしかねつも

秋海村

母の病すこしよきに生國に保養せむの
希望深くて八月末より一月餘を過しぬ

秋の日は海をてらしてあたたかし母の生れし
安房の國土

内海のくひこみ岸の松ばやしつまさき上り墓
立ちならぶ

秋の日の晴れかがやける海ぎしの松のはやし
に牛をつなげり

秋の日のかがやく海を過ぎ來り入る隧道はに
はかにひゆる

海ぞひの小山の枇杷は秋の日に花つきしるく
あたたかきかも

風あてのつよき海べの岩根松枝づまりして老
木に見ゆ

母のやまひ心もとなく思へども孫をつけ置き
われかへるなり

若水

元日のあさ日あきらに霜とくる庭井の水をこ
とほぎ汲むも

元日の朝日ほがらにてらす井の水をたたへて
汲みあげにけり

土ふかく冬の温(ぬく)みの下ごもる井の水汲みて年
ほぎにけり

あらがねの土のそこよりわき出づる清水を汲
めば眞冬ぬくめり

深井戸は冬あたたかし年たちて汲む若水を桶に湛ふる

元日とはやおきをして子どもたちよろこびながら諍ひをする

不義理してあること思ひ元日の雑煮の餅をくひちぎるかも

朝霜

けさの朝げ霜いと白くおきにけりなびき伏したる枯草の原

木々の間よりけむりの如く霜とくるあしたしづけきみちをあゆめり

寒　曉

母急性腎臓炎をおこして衰弱はなはだし

眞夜中にきこゆる汽車のとどろきのたちまち
過ぎて寒さたへがたし

看護婦はゐねむりをしてうつつなし息苦しさ
に母は呻(うめ)くも

にはかにも顔のむくみし母親が寢息(ねいき)をのぞく
霜夜ふけたり

燒鐵(やきがね)のするどくあかき夜半の月霜吹く松の枝(えだ)
にかかれり

厠戸の手洗ひ窓の月あかり霜夜はふけてものの音なし

暁近み今落ちかかる月かげにしらじら見ゆる庭土の霜

風すさぶ朝戸のそとの母が聲おどろきてきけば烏なりしか

烏なき氣にかかるこそやすからね朝風いたも吹きて寒けき

亡母

一月十七日夜七時半何の苦痛もなくてみじろぎたるに母の息はとまりぬ

玉の緒のいまはのきはの間にあはず母が手握るあたたかき手を

こころもちわるくなきかと今とひて枕べ立ちしそのままなるに

母逝くと電報うちて立もどる霜夜の月のつきがさくらし

弟の來るまではと動かさぬ母のなきがら寒けく守る

見をさめの母の顔をばゑがきけりゑかきなりけるわが弟は

弟とふたりむきあひ亡母をまもる霜夜の軒の松風

わが母の荼毗の後なる骨形をゆりくづしたり
焚屍人が行爲

火葬場よりかへり來るみち蠶豆のはたけを過
ぎぬ田舍戀ひしも

なき母のやまと炬燵の灰おほし立消炭を挾み
て出す

なき母の蒲團はたけば立つ埃ながの病につも
りつらんか

吸入はじめじめすとていやがりし母今はなし
油紙を干す

なき母の蒲團をさぽす縁先にふるき松毬落ち
ころがれり

寒けれど春の日ざしとなりにけり霜にいたみて咲く沈丁花

喪にこもり家にしあればをさな子はお伽ばなしをせよとせがむも

寒夜

さらさらと吹雪のかかる音さむし母なき今は早寝しにけり

母逝きて三七日過ぎぬ手向けにし水仙の花いまだしぼまず

崖下の長屋の人のこみあげて咳するが夜どほしきこゆ

夜風たち雨戸ゆすりてねむられずかたき蒲團
を寒しとぞおもふ

ふる綿のおもたき夜着を重ね着て夜半の寒さ
に亡母をしのべり

立つけのわるき障子のすきま風夜半の寒さに
眼をさましをり

寢につけばふしぶしいたし亡母のながく病み
しはいたましかりき

雪

雪のふるこの夜しづかにふけ行けば母のおく
つきおもほゆるかも

雪の夜を蒲團のうへに足のべて土ふかからぬ
母おもひけり

母の喪にこもれば家のうちくらし來る人もな
し雪ふりやまず

夜しづかにひと眠してさめにけり軒端の松の
雪おつる音

消え殘る雪にも水をうちそそぎ庭松が根の石
を洗へり

むかひの家根消のこる雪のたそがれてまた雪
ぞらとなりにけるかも

雪もよひ日のくれてなほあかりあり十日あま
りの月の頃ならむ

海藻

母のかたみをもちて富浦に來たる

母逝きて母の姉すむ海宿にふる雨寒きゆふべ
來にけり

雨の夕わがとひよれば亡母よりも髮白き嫗が
土間に火たけり

はなれゐて親しみうすきゆゑならむわが亡母
のうからあきらめのよき

亡母思へど今はすべなし海に出ればくもりて
寒し黄ばむ岩苔

亡母思へど今はすべなし手にとりて磯の玉藻
をおしつぶしみつ

海の藻の玉ひとつづつおしつぶしかそけきお
とをば一つづつきくも

手にとりておしつぶしつつ海草の磯ぐさき香
をなつかしむかも

あまの子はわがとりすてし長玉藻岩をひきず
り遊び走れり

冬海

朝なぎの海べに立てば眼の前の岩間の水はう
づまき流る

亡母の來てよろこび踏みし渚みち冬の日さむ
くわれ一人なる

舟ひとつこなたへむきてより來なり母あの舟
に乘りてをらずや

冬の海朝くもれり里の子が平岩づたひ青海苔
を搔く

青海苔の笊をかかへて女の子岩づたひ行くう
しろ見やれり

この冬をここにといひし亡母思ひてひとつ摘
みけりそら豆の花

ひたをしむ亡母のいのちを眞冬咲く豆の花摘
みことばにはいはず

水仙の花をつくれる丘の畑見てきたりしと告げむ母もがも

鴨

うすら氷に小鴨ねむれりさざれ波よする日なたの方へは行かで

お堀ばた向ひの土手のすぐ下の木にのぼりをり水禽鴨が

赤椿

花と花おしつけあひてひらきたり春の園生の八重赤椿

赤椿しみ咲く見つつわが心つねによわきを今日も嘆けり

藤のわか葉

いとまあり家に居て見る庭垣の藤のわか葉に夕日さすなり

夕づく日藤のわか葉が透徹るうつくしさをば我子に見せてむ

櫻草

春の日はのどかにてりて暇ありわが子が植ゑし櫻草の花

櫻草優しき花といふか我子われもしか思ふ心
似て來ぬ

梅雨

萱草の花咲き見ゆる松ばやし木の隈ふかく梅
雨近づきぬ

松のもと萱草咲けりさみだれの雲ひくくおり
て雨氣だつ朝

さみだれの雨の時咲くあぢさゐは水にひたり
て色あげにけり

さみだれの雨に障らずあぢさゐはぬれ重りし
て咲きひろがれり

紫陽花の花にさみだれふりそそぎ枝ことごとく前のめりしぬ

百合花

夏の休みに子どもつれて再び富浦に來りて

潮風は山ふところに吹きつけて百合の咲く時またも來にけり

夏やすみうしほ浴みにと子どもらをつれてきたれば海曇りたり

曇り日に來たれるものか海ちかき草生の百合の花ゆれもせず

子らつれて來たりし夏の海づらは曇りて早く
日くれなむとす

一本に一つの花の百合おほしわが此頃のさび
しさまさる

蟋蟀

ふりたらぬ宵の雨やみくらがりの木にのぼり
なく閻魔蟋蟀

くら闇の中にきこゆれ雨の間をきほひてなく
は閻魔蟋蟀

雨風の吹き來る宵にはしゐして暗がりにきく
蟋蟀のこゑ

くりや戸にこほろぎなきぬ夜おそく灯をとも
しけり妻かへり來て

夜おそくかへりし妻が水づかひ米をどく間は
鳴かぬこほろぎ

夜上りのまたむしあつしこほろぎのほそぼそ
なきて雨をさそへり

霧

雨はれて日光さやかにかがやけり狹霧薄るる
眼前の山

かしらの上に照る日かがやく門に立ち向ひの
山の狹霧をば見る

海近き小山の裾の草中に隱ろひ咲きぬ蒼朮の花は

海にむく小山の裾の草原にうけらの花の咲くをよろこぶ

雨ばれの秋の日照ればつかね藁地息の乾き待ちかねて干す

内海の濤やはらかに雨霽れて稻のみのり田ぬれひかり見ゆ

海の上てりかへす日はまともなり尻尾ふりをる窪田黑牛

冬日

たたなはる秩父山なみ雪白し街中にして廣き空地あり

けさの心しづかにたもつうれしさよ冬の空氣の澄めるをおぼゆ

はるかなるみそらに立てる煙突の黒き煙に鳶かくろひぬ

節七回忌歌會

君逝きしその日の朝を思ひいでつわれは歯が痛みみち歩みをりき

君逝きしその頃われは何事も手につかずしてくらし居たりき

蕗薹

春の日の寒きがままに來ざりけり莖のび立ち
し蕗薹の花

蕗薹ちさきを擇りて摘みとりぬ爪にはさまる
土のつめたさ

のび立ちて形くづれし蕗薹日あたりよけれ池
のほとりは

裂莢の枯蔓まどふ小林の松に春日のかげまだ
さむし

小林の松に春日のさしそむれ口つつき合ひて
小禽とまれり

悔い

秩序なきことのしげさにおちつかぬ心のつかれながくつづきぬ

いそがしきおもひをしつつ日々をたやすく過すなまけぐせかな

いつはりの多き心を悔いつつも眞面目になればひたすら苦し

十九にもなれるわが兒をいましむる父の心に深き悔あり

兄弟のこころはなれてありなむやとし月ながく嘆きわづらふ

うとましくいかで思はむ兄弟はおなじ親より
わけし血なるに

桐花

桐の花咲くを早しと見つつをり此頃われはお
もひわづらふ

うちうちの私ごとの安からず蒸(むし)あつき日のつ
づくこの頃

雨(あま)ぞらの日ざしたゆたふ午(ひる)休(やす)み桐の花咲く原
を見おろす

原中の桐の花咲く下みちを傘(かさ)さし行けり雨に
なりぬらむ

初夏の馴れぬ暑さに雨風の吹きてし來れば吐息もらせり

紫雲英

げんげんの花田見はらす片岡の松のはやしに早蟬なくも

げんげんの花のさかりに來りけり山田ゆたけきくつろぎをおぼゆ

かかづらひおほきわが家を離れきて山邊にくれば げんげ花盛り

あわただしく來りし用はまとまりぬひとりげんげの花田にあそぶ

青嵐

ここにして山遠けれど吹きおろす嵐はつよく
嫩葉をはらふ

嫩葉木の枝しげりあふおほほしさ今朝一時に
はらひ吹くあらし

朝あらし立木を吹きてすさまじく音たつるほ
かにきこゆるものなし

しげりあひ青みわたれる嫩葉木の木末を走る
あらしの雨雲

あかしやの花吹き飛ばす朝あらし朝早ければ
街のしづけさ

あかしやの枝ゆりなびけおしふせてひた吹き
つのるけさの朝あらし

わが心この頃切にいらだてり今朝のあらしは
嫩葉木をゆする

朝あらしやうやくなぎし後の風に窓より顔を
出して吹かるる

わが家

雨雲は空にうごかずひるすぎになりて照る日
のひたまばゆけれ

鳳仙花庭草山に咲きまじり荒るるがままを見
てくらすかも

白露は庭草の穂におき垂りぬわが朝ごちな
どかみだるる

鴨頭草と蚊帳釣草としげりあひておのづから
にもなまめけるかも

冬　欅

冬ぞらの日かげにぶりて寒けきに高き欅の下
みちとほる

冬されば高き欅の枝叉に圓形寓生のゆれかか
るみゆ

空高く千枝にひろがる欅の木冬の夕べはとま
る鳥なし

麥畠

次男良弟を立川の寄宿舍に入れて

遠近に雲雀なきつぐ青麥の畠の中みちたそがれにけり

たそがるる青麥畠の畦に咲くしどみの花の根を拗切りぬ

くらくなる麥生畠みちかへり來てのこしとどめしわが子思へり

櫻田門外

櫻田のお堀の水の青さび藻掻きあぐる舟漕ぎ
かたむくも

藻刈舟お堀の水に掉させりしめり風吹くつゆ
どきの朝

梅雨頃

五月雨のをやみのひまのうす日てりしづかに
雲の動きそめけれ

梅雨ぐもりただに物うきのみならず紫陽花の
花は色濃かりけり

雨雲の裏日のてりに風もなしおしいつくづく
鳴きそめにけり

梓月庵

籾山梓月氏の住居は五世菊五郎の建てし家なりといふ

夏の日の朝しづけささげの實の青莢はながくさがれり

日をよけて夏青々とささげの廣葉は深き蔭をつくれり

夏の日の朝げに水をうちてあり庭石も苔も檜葉もぬれたり

朝かげにひらかむとすもむらさきの桔梗の苔下ぶくらにて

秋の蟬

いき殘る命ををしみ秋の朝の日ざしぬくめば
蟬鳴きにけり

秋風の吹く日になりて鳴く蟬のひとつの聲は
つづかざりけり

秋の蟬鳴くをしきけばいき殘るいのちひたす
らかなしかりけり

秋の蟬たまたま鳴けり時おそく生れしものが
後にのこるか

秋の日の彼岸を過ぎてなく蟬のたもついのち
は後いく日ぞ

秋の草

みちのべの相撲取草猫じやらしわれにしたし
き草のしげりや

みちのべに埃をあびてしげる草秋は穂に出て
名はあるものを

雑草の中に交れるつゆ草のさやけき色をかな
しまめやも

秋の雨いく日も降るに金線草の花の盛りは過
ぎにけるかも

秋の雨降りてやまねば立枯れの木叉の茸黒く
腐ちけり

大龍寺子規忌歌會

近よりて今日しも久に御位牌の文字をさだかにをがみまつれり

みをしへを直接にうけしかひもなしなどかものいひたしかならざる

豪吾花

今年また冬近づきて豪吾の花にさす日の光弱るかも

豪吾の花うつろひてしぼめるにつゆじも降れりぬれてさむけき

暮秋

なほざりに過(すご)す日おほく秋ふけて鶲(ひよどり)來鳴く聲
せはしなさ

秋ふけて千葉(ち)の彩(いろどり)ととのひぬきはやかにしも
木々は立ちたり

冬日

冬の日に枯れぬ蓬(よもぎ)の葉をむしり何かさびしき
理由(わ)なくさびし

冬の日も日のさすうちはあたたかし枯草原に
かそか蟲鳴く

高き木の松の枝裏夕ばえて冬の葉なみはむさぐるしげれ

夕日さす松の下枝この冬は枯葉がおほくかたまりてあり

壬戌歳旦

しかすがに大晦の人たちもいねたるならむしづまりにけり

新らしき年のはじめにふる雪の雨にしなれば雨を聽くかも

みづからをまづいたはりてむかへつる年のはじめとしるしておかむ

冬朝

けさの寒さことさらきびしひきしまる心のうちによろこびのあり

親のもとはなれたる子がはじめての冬の寒さぞつらくおもはむ

夜雪

夜の雪庭木の枝につむなべにつみおもりしてゆれをるが見ゆ

雪の夜も稽古の人はやすまぬか三味線を彈(ひ)く崖下の家

日のくれてまだまもなきにふる雪はたちまち
深くなりにけらしも

春朝

春雨のふりて寒けきこの朝げ隣の屋根の草あ
をみけり

鶯の聲ほがらかにきこゆなりなほしばらくは
戸をあけざらむ

ふる雨のやむべくもなき朝庭に木蓮の花は咲
きのまさかり

更紗木瓜さかりになりて赤きいろにじめる花
を見ればかなしさ

植物園

四月中旬雨の日の午後小石川の植物園に來る

山椿子もみづきの花も今日の雨にぬれひたりつつ盛過ぎなむ

わが父のつとめたりとふこの園に來りてぞ見る山椿子の花

御藥園のむかしの跡の敷石に春雨ふりて水の流るる

夏花

かきくらすさみだれどきに花咲ける金絲桃は
ぬれ浸りたり

さみだれの一日のくもり深くして夕べしぼま
ぬひるがほの花

稈合歡木の花咲きそめつ梅雨ばれの日光は心
さはやかにして

わが子がり來れる道に合歡木の花赤くにほへ
り雜木の原

夕かげる小庭の隅の笹むらに棗の花はちりた
まりたり

朝雨のすぎにしあとの孔雀草しどろにしげき
花の露かも

史料展覽會の折

高僧たちの筆蹟を觀て

いにしへの聖が御筆蹟の珍しきにもろもろ人の息かかるなり

豐太閤の書狀

おほいなる人がてがみの假名文字はとどこほりなし筆ぶとにして

夏日

なつの日のまひるま暑し硯石洗ひきよめて乾かしてをり

眞夏日のひたてりつくる小沙礫庭黄の色おほく松葉牡丹咲く

夕づく日落ちたる後の花畑濃きむらさきのゑぞ菊の花

月かげのひかりあかるき庭に出て子どもらもげり無花果の實を

秋日

萩が枝にちり殘りたる花寂しこの夕庭の去りがてぬかも

はなれ居る子どもこふしも百舌鳥なきて今朝は寒けくそら晴れにけり

田舍屋のはひりの杉に繩張りてかげぼしにせり赤唐がらし

親子

おさへかねて怒りののしれおのが子をうとましく思ふ親のあらんや

汝のためよかれと思ふ親心とほらぬものか親と子なるに

親と子のしたしみうすくなりゆけり親はなげけど片思にて

晩秋

雨はれて夕日かげさす芒山黄櫨のもみぢ葉むら染めにけり

鶏頭の花いや赤くなりにけりつゆ霜ふりて枯れ近みかも

冬の玉川

瓦弟な寄宿舎に誘ひて夕方の一時間ばかり玉川の川原に來れり

あひに來しわが子の顔のうるみたり寒きかといへば否とこたふる

寒き風吹きすさぶ日に吾子とわれ川原におりて石をひろひぬ

川原風はげしく吹けり日のぬくみ冷めぬ小石を吾子にもたせつ

冬の日の水の流れのいや澄みてすみやかなればこころ嘆かゆ

冬がれの梢に細き夕月夜吾子とわかれてみちをまがりぬ

冬朝

つゆじもの雫にぬれて紫珠實の粒々のつやまさりたる

錦木のもみぢ葉散りし庭の土うき上りたるけさの霜かも

雪

楢の木の古葉のうへにふりつみてあかるく見ゆる今朝の雪かも

ねばりけのある雪ならし拂へども道行く袖にふりたまりつつ

躑躅

よせ植の園の躑躅の花ざかり赤ばかりなり一色の赤

紅躑躅の花のさかりの下照れり箒目の跡のこる庭土

牡丹櫻

日のかげのとほくさすごとあかるくて牡丹櫻に雨ふりそそぐ

をやみてはまたふりいづる雨しげし夕にぞ見る牡丹櫻を

日比谷公園の池

みおもにもなりしわが子をまだ訪はでこの池岸に鯉を見てをり

卵産むとき近づきぬらし池岸に尻尾をあげて
鯉の泳げる

池水にうかびて泳ぐいろくづのちひさきもの
はむれなしてをり

梅雨ばれのうす日かげさす池の面に鯉は大き
く顎ひらけり

粟穂

八月下旬相州腰越に子どもたちをとま
らせおきて

青々と粟の垂穂のゆれつつもいまだ朝日は空
にのぼらず

粟の穂の青々垂るる朝露に日のさし來るが遲き里かも

うちなびく粟の垂穂の芒におくこまかき露のしげき朝かも

こほろぎのなくや稻田の月あかり海近くして夜潮うつ音

稻の田のみちありきつつ月を見る今宵のわれはひとりなりけり

震災

大正十二年九月一日日本橋本町の角に乘かへの電車をおりし時

道にして大地震ゆりにゆり來りせむすべなく
もわが家おもふ

伏見宮御門前に露宿す

眞夜中とおぼゆる頃に雨ふれり燃えたてる火
は燃え盛りつつ

眞夜ふかく雨ふりいでてすべなけれ松の木蔭
にかばへり我子を

我家燒けぬ

燃ゆる火のなかにとどろくものの音に終夜お
びえてをさな子はをり

わが家の燒跡はまだ灰あつしいづこよりかき
こゆ蟋蟀のこゑ

赤彦兄上京

魂あへる人のいのちをひたおもひただちに立
ちて君は來ましし

われら立退きし後古賀氏來りて
火を防がれしかば

ひとたびは火をまぬがれしよろこびをわれも
妻子も忘れざるべし

三日の夕アララギ發行所に着く

みちにして夕立雨にぬるれどもをさなき子すら泣かずあゆめり

きぞの夜はみちの芝生にあかしけり疊のうへにこよひすわるも

今までは馴れて心にとめざりし朝ゆふ事ぞみなありがたき

須吉氏發行所に來る

おもひやる思ひは淺しおそろしき火中逃れて來しと聞けども

いささかの心遣とはおもへどもやけどの藥手わたしにせり

平福兄を訪へるみち

草原のしげみが中を行きしかば雲のかげ浮く
水たまりあり

草原のしげみのなかの水たまり跨ぎて行くは
をしくおもほゆ

地震ゆりしあとかたもなし風むきに青草波は
露をこぼせり

發行所の隣家に移る

植込みの木槿の花の咲きつづきこの二階家は
旅ごころなる

末の子愛子發行所に涙吉氏と遊び歸りて語れり

いもうとのおもちやは家の燒跡に形のままに
殘りてありけり

ままごとのおもちやも今は形見なり拾ひ來り
てせつなかるらむ

わが家のありし傘谷に來て

舊の家ありしところの燒跡に來りて見れば心
怖ぢたり

あさはかに家居移しし悔心このやけあとに立
ちて嘆かゆ

小川町通焼死人出てたりとて騒げり

さわがしくあつまりよりて焼跡に人垣つくる
物見ごころか

九段下なる俎橋は假の橋を早くもかけたり

まざまざと馬の死骸を見ながらに假橋わたる
人はいそげり

その後

焼跡の灰かき探すおやと子とむかひあひゐて
なぐさむらしき

焼跡のほこりはたえずまひ立てり眼をなやむ
人おほくなりにき

夕まぐれ時雨ふりいでて焼跡に立てるも行く
もみなぬるるなり

岡田正美氏を悼む

假名文字と眞名とをまぜてかくならば假名の
筆つき弱しといひし

假名文字ははかなき筆のすさびぞと口癖なり
し君は逝きつる

秋の日に泊夫藍の花咲きにけり植ゑけむ君は
いまだ見ざりし

アララギ發行所の庭

露霜のつめたき朝になりにけり藤雞頭は伏し
ひろがりぬ

秋ふけて藤雞頭のひろがりし花にも葉にも露
溜りけり

枯れそむる藤雞頭の種はまだかたまらざれば
こぼれざりけり

琴

そこかしこ持ちはこびつるかひありて妻が手
なれの琴は殘れり

假住の家居に馴れて妻が彈く琴のねたかくひ
びききこゆれ

時雨ふる夕べしづけしをさな子に彈かせて妻
がうたふ琴唄

除夜に長女の假家住をおもふ

大歳の日はくれにけり嬰兒を抱きかかへつつ
ひとりかもあらむ

千駄ヶ谷

假小屋の長屋並びてところ狹し今朝は日ささ
ぬ雪もよひぞら

土筆

をさな子は土筆つみきて數よむと土をこぼせ
りわが文机に

をさな子は土筆のはかまむきながら學校の事
をはなしかけたり

春のはじめ

築山の裾のこみちの霜柱くづれて白し片陰に
して

うちわたす岡べの桃の若立ちてしもとにほへ
り春たつらしも

寢覺にはもとの家居のここちせり朝戸に來鳴く春のうぐひす

春待ちてつぼみをひらく黄水仙下むきにけり八重のおもみに

松の間に梅まじり咲く庭廣し春の夕の風は寒けれ

降りなづむ椿の花の雨雫日はてらずして一日くれけり

屏風坂展望

家並みの亞鉛の屋根におしてれる春日は雪のふりしが如し

餘・寒

うちつづき身まがりてゆく人思へりいつまで
か寒き春のはじめは

雪まじり風ふきたつる夜明けにて街の家々ま
だ眠りたり

わが心あわただしもよ三日四日の病にわかき
人死にけり

弟四郎の妻逝く

なき人をしのぶよすがのすくなさよ心さびし
く通夜なしにけり

なき人の葬送のみちに青柳のしだれなびくを見たりけるかも

震災後佛壇なし

過去帳を机の上にかざりたり春の彼岸に花立のなき

墓所の松

わが家中興の祖節齋翁が墓所に植ゑまししし數株の松は今に茂れり

み墓べに立ついしぶみの倒れぬは根張松こそかためたりけめ

松が根は張りてひさしも土ふかく御亡軀の瓶守るらむ

雨風の隱の笠とみ墓松枝さしのべて年を經にけり

未だ餘震の大なるがありと云ふに

地震ゆりし後のまなるみ墓べに水を手向けて袴沾らしつ

春草

虎杖の芽立若莖ふとやかに青茅草とのびをあらそふ

春の日の夕かげりてもあかるきに早くもつぼむ蒲公英の花

青茅のもとにはなさく櫻草こころはつねに若くねがはむ

晩春九品佛に詣づ

春の日の夕日うすつくかげひろしはたけの中の寺に詣るも

春の日の暮陰せまる山門をくぐれば赤き椿まさかり

菫咲くみ寺の庭の芝原に春の夕日のかげ遠退きぬ

寺庭の古木の銀杏芽をふきて夕あつまる鳥さわがしき

春の日の夕おそく來てみ佛の御顏さだかにをがみかねつる

雨もよひ風

憲吉兄上京平福兄につれられて玉川のほとりに來て

花ちりし藤の空ぶさそよゆれて雨もよひ風ふくゆふべかも

歡しくてけふこそは見れ藤棚にちり殘りたる房先の花

白田舍にて

昨日の夜の雨にぬれたる竹の葉のつゆをみず
やとのる主人かも

寒竹のしげりあひたる下草にむらさきふくむ
をだまきの花

郁子の花

郁子の花咲ける軒端の棚ひくし暮はてなくに
てらす三日月

もの戀ふる心さまねし夕月夜軒端の郁子の花
咲きにほふ

雀來ていたいた草にとまりけり聲あげて追ふ
をさな子あはれ

初夏

藪手毬白き簇花咲きそめて若葉のながめ夏めきにけり

代々木山谷の家

ここの家住みつくとにはあらねども夏の朝窓
富士が見ゆるも

雀なく聲いとけなし葉櫻のしげる軒端を巣立
ちそむらむ

向つ家は足場をくみて地震後の手入れはじめつ夏になりにし

聖心女子學院

色うすきがくあぢさゐの花咲けり一叢竹のなびく傍

駿河臺

下街はみな燒跡の假家建いぶせくもあるかさみだれぐもり

むれ立つは家鳩ならし梅雨どきの濕風吹く夕暮ぞらに

焼跡の街の假家の上空に鳩の飛べるを見れば
うれしき

暁にめざめて
窓あけて風入れにけり一しきり夜のあけがた
をなく蟬の聲

夏日焼跡に來りて

わが家の焼跡いまだ家建たず崖のくづれにひ
るがほの咲く

焼枯の松の立木に蟬なけりまたここにしも住
まほしけれ

湯田村

大正十三年八月女婿正彦の歸省せる折から備後湯田村の家を訪ふ

眞日照の暑さに堪へてはるばると稻田の中の古き家に來つ

胡麻の花咲けるはたけのなつかしも旅なれぬ身の疲れ來る道

百數十年前の建物のままなり

父君も祖父君も住まれけむ昔のままの家のたふとさ

戸閾のみぞが深くもくぼみたり昔のままに住める家かも

煤じみのままにつやもつ床柱ながく住み繼ぐ家をいははむ

今年の旱魃は三十年來の事といへり

ひでり井のかなけの水をくみためし風呂たきにけりわがもてなしに

ひでり井のかなけの水はざらつけり風呂にひたりて心慎しむ

ながひでり稻枯れゆけば村内の水あらそひを今朝告げ來る

雨乞の寺の鐘鳴りひびくなり白晝の如く月てりわたる

旱田に引く水つきて稲の葉の枯れゆく郷に來あはせにけり

遠く來し稲田の中の家にねて蟲のなくねをきかぬさびしさ

菅茶山翁の廉塾は近き所なり

正彦に血のかよへればこの郷に來りて君をしのびまつれり

ここに來てむかへる山の形のごと心おだしくおはしたりけむ

正彦幼にして父にわかれ家産既に散失せり

わが婿の正彦なればうしろ指ささせはせじと
おもへるものを

正彦の子どももやがてうまれむにその子に遺せこの古き家

この國にふたたび來る事もあらむこの家このまま住むよしもがも

あの山もここの稻田もわが家のものなりしと
いふよそごとのごとく

わが如く後に嘆かむをさなくて父のなき子は
家をうしなふ

夜墓に詣でて

夏の夜の雨氣にくもる月くらし御墓裏みぞ竹しだれたり

盂蘭盆にて再び墓參す

月照れり山裾岡の墓まうで下の蓮田の花ほの白く

暑苦しく咽喉乾けり

飲水の今宵は盡きてなしといふ去年の地震を復語るかな

芦品郡に行くに稲青々し

夏の日の沖田の稲ゆわたり來る風は門田に吹きをさまりぬ

いづ方をむくも稲の田そよぐなり小川流るる村に來にけり

滯在十餘日になりぬ

里芋の根もりの土をかきわけてさがす子芋はまだ數のなき

夏の日のひでりつづきに枯れもせぬ藜の葉をば食べてみにけり

赤彦兄病む

君病むとききて手紙を出しに出ぬ夜空は晴れて天河見ゆ

君の病心にかかる宵なれや澄めるみ空をしばしあふぎつ

正岡先生二十三回忌

御母君ことし八十になりたまひけふの法會につらなりたまふ

佛前の讀經ききつつおもひいづる昔の事を誰とかたらむ

御名をばせめてはけがしまつらじと願ふすら
だにわれおぼつかな

四郎より文通あり

秋風のふく日になりて門内に生えたる草がう
ちなびくとよ

身まがりし妻のなげきの日をかさね寒さにむ
かひ術なかるらむ

秋夜弟の家にて

秋の夜にいむかひをれど話もなし見するがま
まに繪の本を見る

ふたり居てことばすくなし兄弟のあやにさび
しきおもひをぞする

晩秋

けだものの毛なみの如く草原の草伏しなびき
枯れにけるかも

枳殻の立枝つぶら實色づきぬしとどふる雨ゆ
ふべ寒けし

朝日さす庭しづかなりこすもすの花ゆれやま
ぬそよ風のふき

諏訪湖

大正十三年十一月早朝赤彦兄につれられて諏訪湖畔に來る

浮霧の消えうすらぎて朝方の湖のおもてのあらはるるかも

味鳧のうかべる見れば湖のこほりはいまだ張りつめぬらし

向つ山雪つみ白しみづうみのあした早きに小舟うかべり

小溝より湯の氣たつなり湖ぞひの畠菜枯莖霜白くして

今春平福兄母堂と來遊されし折の事赤彦兄の懇々と語らるるをききて

春雨の霽れし朝の湖にうかべし舟は羨しきろかも

諏訪明神上社

御手洗のもとに落葉のからびたりただしんしんと神さぶるかも

みやしろの渡殿くらし釘づけのゆるみし板をふむがかしこさ

わが友のまもり神座すみ社は古りてたふとく冬さびにけり

わが友の身をすこやかにつねにもと乞祈まつる諏訪の明神

冬の日のゆふべ詣ればみ社の御前しづかにせ
まるをぐらさ

廣前の夕ぐれさむし上の山の立木みながら葉
をおとしたり

廣前のそよぎに赤き實のなれり神の御心なぐ
さめむため

神垣の木立の中にあらぎの木垂見るこそ古
きみ社

これやこの御柱かやふと柱立の眞直に齋ひす
るたり

火災

茂吉兄歸朝の日近づきて病院も居宅も
全燒す

燒跡のいぶりくすぶるきな臭さ胸さわぎして
行きつもどりしつ

燒跡はらうがはしさの極なりわざはひにあへ
ばかくみじめなり

茂吉兄歸朝

かへり來し君に逢ふこそうれしけれよろこび
事はすくなきものを

かへり來し君ふとれりとつつましく古實のい
ふをきくがうれしき

孫

重雄歩きはじむ

みどり兒のあゆみはじめし足どりを數へはやしてよろこびかはす

みどり兒は立ちてあゆめりゑみはやす母のわかければわれはかなしき

手をのばし抱かむとすれば聲あげてなく兒すべなしあやしかねつも

智慧のつくまづはじめかやみどり兒の人みしりして大聲になく

母親の乳ぶさに頬をすりよせて見馴れぬ顔の
人みしりすれ

櫻咲く春べにならば紐つきの草履はかせて外
あるかせむ

春暖

螳螂のたまごの孵る時ならし泡脹るれ躑躅の
枝に

竹やぶの下の透間ゆ見とほせる青茱ばたけの
朝のいろよさ

春の日の夕暮寒くさびしきに竹の古葉のしげ
くちるかも

古葉ちる竹籔かげのほそみちを夕に過ぎてわ
がつかれたる

蘩蔞にまじりて咲ける紫のこまかき花はあは
れなりけり

蘩蔞のやはらかき實をむしりみつ春日のくれ
の惜まるるかな

どうだんの花ちりしかば青き葉のもとの姿と
なりにけるかも

春ふけて日のかげつよくなりにけり葉形のび
ゆく菊をめづるも

櫻草

青茅のしげみに咲ける櫻草花ちらばれり見ゑがくれして

若茅の根にうつりよき櫻草濃きもうすきも赤き色なる

櫻草茅根に咲けり去年今年繼ぎて見しかば殊にうつくしき

五月五日

孫の手をとりて門べをあゆませつ心だらひにけふは遊ばむ

抱きあげて外に出づれば嬰兒のすこしおもたくなりにけるかも

人の家の鯉ののぼりを見せむとて嬰兒抱き外に出でたり

次女の家の初節句

母の乳飲む兒まもりてかたはらに一人は立てりこの從兄弟どち

たまたま暇あり

この朝げ桐の花咲く屋敷町いとけなき兒を歩かせにけり

坂になるみちのかたへの桐の花見あぐるそらは皐月ばれかも

手をはなしあゆましむれば嬰兒(みどりご)の小石つかみてなげすてにつつ

左千夫忌歌會

左千夫忌をくりあげにける春の日のあらしの風は若葉ゆすれり

外國(とつくに)にありし茂吉がかへり來てひさしぶりなり今日の左千夫忌

書(か)讀みさして

あなあはれもつべきものは子なりけり子は身にかぶれ父親の罪

つねの日のむつましささへおしはからるれ十
二の兄は弟諭しつ

親人の犯しし罪はわが身らのためと訴ふるよ
き子なりけり

兄弟の心あはせてねがへれば父親の罪はゆる
されにけり

子らゆゑに罪ゆるされし父親は天地の中に泣
きあげにけむ

盗みせし一人ゆるされ連の一人流されにけり
子はなかりしか

行狀をあらためぬ子をもつわれは身につまさ
れて書よみさしつ

續日本紀、元正天皇養老四年六月の條云、漆部司令史從八位上大部路忌寸石勝、直丁秦犬麻呂、坐盜二司漆一並斷二流罪一於レ是石勝男祖父麻呂年十二、安頭麻呂年九、乙麻呂年七、同言內父石勝爲レ養二己等一、盜二用司漆一緣二其所犯一配役遠方、祖父麻呂等爲レ慰二父情一冒レ死上陳、請配二兄弟三人一役爲二官奴一贖二父重罪一　詔曰人稟二五常一仁義斯重士有二百行一孝敬爲レ先、今祖父麻呂等、役レ身爲レ奴、贖二父犯罪一欲レ存二骨肉一理在二慈愍一宜下依レ所レ請爲二官奴一、卽免中父石勝罪上、但犬麻呂依二刑部斷一發遣二配處一

遠蛙

父親は女(なんな)の子をばいとしむと人のかたるをうなづきてきく

弟は口ごたへしてにくけれどうはべしたがふ兄にまされり

はたちまへなまものじりのわがままがなほらむ時を親は待つなり

なにごとも男らしくはふるまへぬわが子はわれに似たりとおもふ

子をおもひ婿をおもひてねつかれず空梅雨の夜にきく遠蛙

天神橋畔の家

舊よりの家も屋敷もありしもの借家ずまひを嘆かひもせず

借家してしばしば移り住みかへつあやしみもせぬわが子らをあはれむ

鈴なりにちひさき實をばむすびたり移り來りし庭の枇杷の木

棕櫚の葉の風音(かぜおと)きけりむかしわがさびしと思(も)ひてききし風音

銀杏の花

こぼれちる銀杏の花をあたまよりあびて遊べり屋敷内の子

風ふきて銀杏の花のちり來(く)なり日がくれてなほ木下(こした)見ゆるも

麹町の家の跡

たけ高くよもぎしげれり去年(こぞ)はまだかばかり草の生(は)えはせざりし

焼枯の一本松を目じるしの賣地になりて草のしげれる

中秋名月

十五夜の月のさやけさ二階家の縁より空は見とほしにして

遠くをば見る度の眼鏡かけにけり今宵の月のかげぞさやけき

月の面にかかる白雲浮きて見ゆ雲をとほして月のあかるき

中空をすぎゆく雲の白雲のはなれて月のいやさやかなり

正彦の家にて

桐の木のひろがる枝の風あたりあらしになりて日はくれにけり

ひもじくてなくにかもあらむ汝が母を呼ぶに來ざればせきたてにけり

まくりみるこの子のふぐりすぼまれりこのまに腸のさがらずもがな

すこやかにそだちゆくかも母親の乳がたらずとなげくものから

大龍寺にて

大正十四年十月四日子規忌歌會の日

御墓石御名のくぼみにうす苔のつきたる見れば年ふりにけり

御墓石ふるびつきぬと年月のひさしきほどをわれ思ひけり

柿蔭山房

大正十四年十月二十五日の朝赤彦兄の家を訪ふ

君が家ここにしありと山坂の霜どけ道の履(ぶ)みやすきかも

はしゐして湖の見ゆるをよろこびぬ君が家居に今日は來つるよ

庭松のながき延枝のささへ杖いたはられつつしげり榮えむ

燒胡桃嚙みつつ飲めば茶の味の專にしたし君がもてなし

亡友の訪ひ來しむかし物語その人たちもここにすわるか

額のうへに眼鏡おしあげ外にむかふ君が面をば今日ぞよく見き

君さきにたちてあたりを見せらるれ井戸の深さをのぞきなどしつ

286.

春鳥のなきとよもさむ時思ひて背向の山にむかひつるかも

巻末記

歌集『庭苔』は大正五年三月より同十四年十月まで、丁度十年間の作を輯録したものである。歳月不待人、早くも過ぎた跡をふりかへると、我身ながらにうろ覺の事がおほい。

十年は一句切である。心に張りのない怯懦者も、アララギの諸友が、一つ心に督勵して下された御蔭で、此一册が出來た。

移さなくともよかつた家を移した心得違から、借屋住居をするやうになると、轉々して麹町元園町に來た。ここへ來て歌心がおこつ

た。末の娘が生れ、生の母がながく病んで逝き、長女が嫁入をした。平福兄が全集や叢書のまとまつた書籍を、求めて贈つて下されたのもここの家での事であつた。八年の月日を經た。

大正十二年九月一日の地震後の大火が、何もかも灰にしてしまつた。一度は藤澤古實氏が懸命で火を防いで下されたが、翌日再度の出火があつたので全燒した。

家族一同發行所の御厄介になつた。速時に上京された赤彦兄の御世話を受けた。當時余は病氣のために食物をかぎつてゐたので、かゝる喘嗟の間にありたけの食パンを買ひあつめて春貧つて來られたのを頒たれた。平福中村兩兄からも一方ならぬ御世話を受けた。

震災後代々木に住むやうになつた。近處を三ヶ所移つた。現在のこの家は二階家で風とほしよく日があたるから、落着きたいと思つてゐる。

震災の時、余が男の子二人が、相州腰越の百姓家の間借をしてゐて、棟がおちておしつぶされた。仕合せは緣側に萬年青の鉢があつたが、それがころげて透間が出來、かすかに日光がさした。それで長男の良兄は弟をはげまして後へつかせ、その光をあてに屋根の古葦を搔きむしりおしわけて、辛くも這ひ出したさうである。此邊つぶれた家多く、つぶれた家で命助かつた者は少なかつたといふ。これを思ふと二三得がたき物を失つたけれども、わが子の命無事なり

し事は神佛の加護であり、わが祖先また血脈を絶たざらしめたのであらう。

余が家は幕府の醫官で先祖が法眼であつた。文政文化の頃に節齋と云つた人がえらくて法印になつた。男子がなくつて養子したが、勁齋と云つて、同じ時に法眼になり和漢の學にも通じ藏書家であつたが夭折した。次も養子で余が祖父了允晩年桐蔭と云つた。早く法印になつた。謹嚴なる守舊主義で動かなつた。父良節は維新の際だつたのでただの漢方醫でゐたが、大層氣概が高く大酒家であつた。余が九歳の時祖父に先立つて歿した。余はやはり奥醫師であつた曾谷氏から、嫁して來られた養母のあつい慈育に成長した。幼少の時

は病身で中學校を二年で止め心まかせに日々を過してゐた。何をしてでもよい、好きな事を習つたらよからうと云はれた。それで國文や歌などを習つてまづ遊んでくらしてゐた。余が廿二歳の春に世を去られた。この集中の母は生母なのであるが、眼に一字をも知らない田舍の生れで、ほとほと一生涯を絶對服從で過ごした。みな一家にくらしてゐて生母は養母を心から大切にしてゐた。余は十七八までわけ分らずだつた。晩年余が零落中もあきらめて氣永に芽のふくのを待つてゐてくれたが、どうにか道がついたらわづらひ出してあの世へ立つた。

右の如く余の家は節齋翁以來醫術と學問とを兼ねた人がつづいて

ぬたが、世態が一變し再變し、節齋翁には著述がないし勁齋の著は小兒戒草が上木されてはゐるが、昔日をしのぶよすががすくない。

余は今更悔るかひなき不孝者で祖先を語るを愧づるが、子孫の後には家をおこす者が生れるだらうと思つてゐる。

この歌集の十年は元園町と代々木へ來ての二年とである。わが家のほかは芝の私立女學校と小石川に在る御家の文庫とが主な通勤先である。どこらも庭園が廣いので、四季折々の雅致がふかい。文庫の主君は我國の古い學問を好まれ、古書を熟讀研究されつつあつて平素御恩惠を蒙つてゐる。余には祖先よりの主家筋の御一家であられるので、御城の昔を思ひ合して有難い事がたびたびある。

○

一昨年（十三年）の年末に赤彦兄が高木の家から來年は是非歌集を出す決心をせよと、いひ越された。この決心の二字はつよく感じた。歌集の話は秋頃からあつて平福中村兩兄からもすすめられてゐたが年が明けて、發行所の二階で赤彦兄は熱心に余の決心を促がされた。因循して確答せずにゐると、勉強にもなりますからといひ添へられた。此一言には返すことばがなく、と承諾をした。この席に藤澤君がすわつてゐた。

赤彦兄は白水吉次郎君に依頼されて、アララギ所載のものの年別

の淨書をおくつて下された。今更ながらあまりに拙く、どうにも手のつけやうがない氣がしたが、つとめて訂正をなし、改作をなし、記憶をたどつて未發表で失つたものを新たに加へたりしてゐた。一月に歸朝された齋藤兄、東京に住まはるるやうになつた土屋兄からも催促して下された。せめ手がふえたので凝縮してゐるのに、赤彦兄は藤澤高田君等からもせき立てるがいいと云はれたとて、元氣の人たちからも催促された。これ程までに心をつくして下されたのに遲れに遲れ、のびにのびて一年過ぎてしまつた。ところが突如今年一月赤彦兄が不治の大患にかかられ、三月の休暇は狼狽と愁傷とにくらした。余はまた張合ぬけのした氣もちになつたが、これは何で

も纏めれば第一故人の靈に相濟まぬ故、柿蔭集の出版につづいて世に出すに至つた。然はあれども、その人なし。まづ手に取りあげて頂きたかつたのに、怠慢の罪責むるも及ばず、愁然として初秋の天をあふぎ見るばかりである。

平福兄齋藤兄中村兄土屋兄藤澤氏高田氏、故赤彦兄の御遺族の方々、今發行所におきふしさるる健次氏、此淨書の勞をとられた白水氏、其他の方々へも早速に見て頂いて御體を申述べたい。

この出版をすすんで引受けて下された古今書院主人橋本氏は、友人の情誼で組替や校正を重ねるのを許され、平福畫伯が原畫の妙味をくづすまいと木版の上に苦心されたり、一方ならぬ面倒をみて下

された。これまた御禮を申さねばならない。

平福兄はいつでも御多忙なのは申迄もないが、昨今普請をはじめて居られるその中で、殊にさまざまに心をつくされて、この裝幀をして下されたのである。

余の歌の友はアララギのほかには一人もないが、歌よまぬ友四五人弟婿子ども、一々其名を記さぬが。みな歡んでくれると思ふ。

この歌集一冊が、世に出る迄にはかくの如くの御厄介になつてゐる。此集を披かるる諸彦は歌の拙きには失望さるるであらうが、余の如き愚鈍の者すらも、どこまでも鞭撻奮勵させて下されし諸兄の篤く深き友情なば學ばれん事を切望する。

○

明治三十五年六月十一日の「病牀六尺」に、窮して而して始めて一條の活路を得、始めより窮せざるもの却て死地に陷り易し。と云ふ一條がある。これは余が（廿四歳であつた）愚痴をきかれて正岡先生のかかれたのである。其頃からも自分の身上に就いて困つてゐた事がかなりあつた。先生逝去後余はいろいろな事に手を出して、四五年のうちに家產を蕩盡してしまつた。何の學歷も藝能もない身が僅の月給を貰つて、はじめて一人立で世間へあるき出した。その六年目に赤坂の家主が改築のため移轉をせまつたので、妻と麴町邊

をさがしに出た。市ヶ谷見附をはいつて、東郷坂の方へと行く途中の大銀杏の傍で、思がけもなく中村兄に出あつて聲をかけられた。アララギは行つてゐるか、何か出すやうにと云つて下された。何年振であつたらう。まことになつかしくおぼえた。嬉しくてその足で麴町小學校前の小路に來たら、二年前赤坂へ移る時見た家がまたあいてゐた。妻は家賃がすこし高いがといつた。一昨年の時にはとても住みきれないといひ張つた。生活が幾分か樂になりかけてゐた。

元園町の家は高い崖の上の一番隅にあつて、家の廻りに木立があり、緣に立てば眺望もあり、崖下の往來を隔てて谷向うの家居の庭が見えた。座敷の正面に一本いい松があつて、幹太くまづ余をよろ

こばせた。緣側にはガラス戸がたててあり。移轉して來た夜、何だか嬉しく寢かれると、松の中枝に朧な月がかかつてゐた。家に居て月見る事などは何年か絶えてなかつたのに、居は氣を移すといふがその通りであつた。

このすこし前からである。余は巢鴨行の電車で二三回齋藤兄にあつた。勤務先がおなじ方角であつたからだ。元園町に移つてからおあひした時、久し振に歌が出來たから見て下さらぬかと尋ねたら、心よく、幸明日は病院の宿直日だから夕方に立よれと云はれた。熱心に意見をきかせて下された上、葡萄酒に單舍利別をまぜて飲ませられた。ただちに醉つた。

翌日の夕方、赤彦兄を富坂のいろは館におたづねした。午前齋藤さんが立寄つて話して行かれたとの事であつた。歌を出したら一應見て下されてやはり熱心な歌の話をおききした。赤彦兄におあひしたのは、此四年前長塚氏を神田の橋田病院に見舞つた時、紹介されたのが初對面であつた、打絶えてゐたのだから、心中長塚氏を思ひ出すのであつた。

其後齋藤兄は洋行され、中村兄はめつたに上京されぬので、余は萬事を平福兄赤彦兄に相談した。歌の方はわけて赤彦兄に教へられた。鈍物を氣ながに導いて下された有難さは心身に沁みてゐる。

正岡先生の御在世中も忘けてゐたから、其後氣ぬけしてしまつた

のは當然であり、左千夫氏節氏から屢々すすめられても、その時機を得なかつたのは殘念の至りであつた。幸の多い余にはアララギの諸兄が居られて、今日では一生涯歌はやめられないものになつてしまつた。何だかふるくからの歌よみのやうでもあるけれど、氣まぐれにやつてゐた程度だから、舊のは別にして、この『庭苔』からよみはじめたものとしてほしい。それにしても一つ處をぐづついてゐて申譯がない。愚鈍な質であるのに第一が不熱心だからだ。

昨年夏は比叡山上のアララギ安居會に出席し、齋藤兄土屋兄武藤君とにつれられて、汽車で大和路をよこぎり、土屋さんにくはしく說明して頂き、高野山では佛法僧鳥の聲をきき、和歌浦や紀三井寺

に詣つた。中村兄の鉾池庵を訪て一夜御厄介になつた。秋にはまた赤彦兄の御世話で信濃の方から小池晴豐氏に案内されて木曾深山の紅葉を見物した。余が旅らしい旅はこれから覺えるのである。今年も秩父の三峯山から下りる朝の雨降に、草鞋を草履の緒のやうに勘ちがへして、大いに笑はれて甚恥入つた。かかる事をも記すのは、余の歌の拙なき所以の一面を明かにしておきたいためなのである。

自分の住居よりふみ出した事のなかつた過去は、狹い庭土の苔の色にしたしんだのであつた。もし余が第二の歌集を輯む時があつたならば、それには旅の歌なども載せたいと思ふ。それで昨年の夏秋の旅の歌は取殘しておいた。昨秋の十月、それは朝の間の一時間

ばかりであつたが、柿蔭山房をおたづねした折の作をば、卷のをはりにとどめて、故人をしのぶ心やりとはなしたのである。

この集の歌はこの半分に減してもいいのだが、未練な心から意外に増加してしまつた。それぞれの方から示教をあふいで啓發したい願望である。

筆をおかんとして、先師故友今のアララギの諸兄に對して、みだりに御名を繰返したのを許して頂きたい。

ここ數日のうちにはいよいよ自分の歌集が出來る。忝い。

大正十五年九月十二日　　岡麓

大正十五年十月十五日印刷
大正十五年十月十八日發行

歌集 歴吉 奥附
定價貳圓五拾錢

著者 岡三郎

東京市外西大久保四五九
發行者 橋本福松

東京市本郷區眞砂町三六
印刷者 左手薫

東京 日東印刷株式會社 印行

版權所有

發兌元 東京市外西大久保四百五十九番地 古今書院
振替東京三五三四〇番

アララギ叢書目次

第一編　島木赤彦・中村憲吉合著　馬鈴薯の花　古今書院發行　定價壹圓八拾錢

第二編　齋藤茂吉著　赤光（しやくくわう）　東雲堂發行　定價貳圓參拾錢

第三編　古泉千樫著　屋上の土　未刊

第四編　島木赤彦著　切火（きりび）　品切

第五編　齋藤茂吉著　短歌私鈔　品切

第五編　齋藤茂吉著　續短歌私鈔　品切

第六編　中村憲吉著　林泉集　春陽堂發行　定價壹圓八拾錢

第七編　齋藤茂吉著　童馬漫語　春陽堂發行　定價貳圓五拾錢

第八編　島木赤彦著　氷（ひ）魚（を）　岩波書店發行　定價貳圓五拾錢

第九編　長塚節著　長塚節歌集　品切

第十編　齋藤茂吉著　あらたま　春陽堂發行　定價貳圓四拾錢

第十一編　伊藤左千夫著　左千夫全集　品切

第十二編　松倉米吉著　松倉米吉歌集　古今書院發行　定價壹圓五拾錢

第十三編　土田耕平著　青杉　古今書院發行　定價壹圓八拾錢

第十四編　石原純著　靉日　品切

第十五編　中村憲吉著　しがらみ　岩波書店發行　定價壹圓八拾錢

第十六編　島木赤彦著　歌道小見　岩波書店發行　定價壹圓五拾錢

第十七編　アララギ發行所編　大正十二年震災歌集　灰燼集　古今書院發行　定價壹圓八拾錢

第十八編　島木赤彦著　太虛集　古今書院發行　定價貳圓貳拾錢

第十九編　村上成之著　翠微　古今書院發行　定價壹圓五拾錢

第二十編　土屋文明著　ふゆくさ　古今書院發行　定價貳圓參拾錢

第廿一編　島木赤彦著　萬葉集の鑑賞及び其批評　岩波書店發行　定價貳圓

第廿二編　岡麓著　苔　古今書院發行　定價貳圓五拾錢

第廿三編	島木赤彦編	アララギ大正十三年度	年刊歌集	岩波書店發行 定價壹圓五拾錢
第廿四編	齋藤茂吉著	アララギ發行所編	故人歌集 1	近刊
第廿五編	齋藤茂吉著		つゆじも	近刊
第廿六編	齋藤茂吉著		金槐集私鈔	春陽堂發行 定價貳圓八拾錢
第廿七編	齋藤茂吉著		良寛和歌集私鈔	近刊
第廿八編	齋藤茂吉著		童牛漫語	近刊
第廿九編	齋藤茂吉著	アララギ發行所編	故人歌集 2	近刊
第三十編	平福百穗著		歌集	近刊
第卅一編	藤澤古實著		歌集	近刊
第卅二編	島木赤彦著		柿蔭集	岩波書店發行 定價貳圓
第卅三編	齋藤茂吉著	アララギ發行所編	年刊歌集	大正十四年度 近刊
第卅四編	齋藤茂吉著	アララギ發行所編	故人歌集 3	近刊